「ベレアにて」　2024年04月05日

きょうだいたちは、直ちに夜のうちにパウロとシラスをベレアへ送り出した。二人はそこに到着すると、ユダヤ人の会堂に入った。ここのユダヤ人は、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた。そこで、そのうちの多くの人が信じ、ギリシア人の貴婦人や男たちも少なからず信仰に入った。ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、ベレアでもパウロによって神の言葉が宣べ伝えられていることを知ると、そこへも押しかけて来て、群衆を扇動し騒がせた。

それで、きょうだいたちは直ちにパウロを送り出して、海岸の地方へ行かせたが、シラスとテモテはベレアに残った。パウロに付き添った人々は、彼をアテネまで連れて行った。そして、できるだけ早く来るようにという、シラスとテモテに対するパウロの指示を受けて、帰って行った。（使徒 17:10 ～15）

パウロの宣教はテサロニケで大きな成果を上げたが、それを妬んだ人々によって、町を混乱させる騒動になった。信者になった兄弟たちはパウロとシラスの身に危険が及ぶことを恐れ、秘密裏にベレアに送り出した。ベレアに到着すると、二人は変わりなくユダヤ人の会堂に入り、福音を説き明かした。ベレアのユダヤ人はテサロニケのユダヤ人よりも素直で、熱心に御言葉を受け入れ、真実であるかどうか、毎日、聖書を調べていた。多くの人が主イエスを信じ、ギリシア人の貴婦人や男たち、即ち、ユダヤ教に改宗した異邦人の中に、パウロの説く福音を受け入れる人たちが少なからずいた。ユダヤ教に改宗した異邦人が福音を信じるという事態が至る所で起こっている。彼・彼女たちは唯一、全能の神、律法を守る高い倫理性に惹かれ、ユダヤ教徒になったのであるが、律法厳守の戒律の厳格さを重荷に思うところがあった。パウロの語る福音は、主イエスを信じる者は律法（行い）に関わりなく、義とされるという教えで、素晴らしい解放と捉え、イエス信者に再改宗したのではないか。どの宗教も、人間の側の禁欲や献げ物の要求に応える功績によって救いに与るという要素を持っていた。ところが、パウロの説く福音は人間の行いに関わりなく、信じる者に神からの無償の救いが与えられると聞かされ、異邦人たちを惹きつけた。パウロの宣教があれほどの勢いをもって広がったのは、この「信仰義認」の福音が戒律からの解放をもたらす喜びにあったと思われる。

ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、ベレアでもパウロによって神の言葉が宣べ伝えられていることを知ると、ベレアまで追いかけて来て、群衆を扇動し騒ぎを起こした。彼らは割礼と律法を蔑ろにするパウロの宣教を許せなかったのである。割礼の否定は神の民である証しの契約を交わしたアブラハムを否定することであり、律法の否定はエジプトの奴隷状態から解放してくれたモーセを否定することであった。ユダヤ教徒たちの信仰は自分のアイデンティティそのもので、これを否定することは断じて認められないとしていた。彼らの怒りは大きく、パウロ、シラス、テモテの身に危険が迫った。シラスとテモテはベレアに残ったが、敵愾心は大きかった。信者になった兄弟たちは、パウロを海岸地方へ行かせて送り出し、アテネまで連れて行った。アテネまで連れて来てくれた兄弟たちは、シラスとテモテにできるだけ早くアテネに来るようにとのパウロからの指示を受けて、ベレアに帰って行った。パウロの宣教は伸るか反るかの命がけで、聞く者に自分の実存をかける決断を迫るものであった。